北海道の自然（北海道自然保護協会会誌） No.54 2016，63-65

道東野生動物保護センターでの野生動物保護研修の23年間の報告
～鳥獣個体保護から生態系全体保全へ

森田 正治

要旨

自宅建設に合わせてミニ動物園を開設すると、傷病野生動物の搬入が相次ぎ、野生動物保護センターを設立した。すると学生らから実習希望があり「夏季野生動物保護セミナー」を開講し、23年間つづけてきたが、今期で終えた。日本の獣医系大学では「獣＝毛物」の教育が主で野生動物の治し方を学ぶことができないため、毎年好評で現役獣医師も含め全国から参加があった。研修は講義・実習・作業・施設研修・自然観察のカリキュラムで、入れ替わりながらの7泊8日の合宿形式である。野生動物保護・救護は「木を見て森を見ず」的な傾向に陥りがちで、自然環境全体にも目を向けともらおうと自然観察も重視した。その間、修了生の「卒後教育」としてスタートした「野生動物保護セミナーin関東」を10回開催し、先進大学での海外研修ツアーを米国4回、オーストラリア1回実施した。野生動物は自然環境の「指標」でもあり、「生命（いのち）の尊さと自然の大切さ」が研修のテーマでもある。

1985年自宅建設に合わせて「森田どうぶつ公園」を開設したところ傷ついた野生動物が持ち込まれるようになり、傷病野生動物の搬入が相次ぎ、1989年に「道東野生動物保護センター」を立ち上げることになった。母校の酪農学園大学の斉藤助教授が急死されご遺族からのご寄付をもとに動物小屋を改築し「JUN診察舎」を作ることができ、要望のあった実習・研修生を受け入れることが可能となった。1993年から23年間(2010年は休講)、夏休みを利用して全国から獣医・動物看護・環境系などの学生、そして獣医師などの一般の方たちも受講し、アメリカ人留学生1名を含む941名が野生動物保護研修を修了している。

日本の大学では「獣医学部」、「獣医師」の名のとおり、「獣＝毛物」が中心の授業で鳥など野生動物の治し方は教えていないことから、実習をしたいとの要望が多く、実習活動をスタートした。2000年からは動物病院を開業し、ある程度の時間を作ることができるようになり「夏季野生動物保護セミナー」と名称をあらため、大学の1～2単位の集中授業といった本格的な内容にした。大学の協力もあり、毎年定員を超えるほどの好評で応募者が殺到するようになったが、体調のことや節目の歳でもあることから今期で終了とした。この分野で若い人たちが研修をする機会が少なく、心残りであるが、マニュアル本を作っているので役立ててほしいものだ。

野生動物救護、すなわち医学や獣医学は個人や個体を対象としているので、どうしても「木を見て森を見ず」的に陥りがちになる。「森も見る」ように自然観察を通して自然環境保全（全体）も重視し、さらに国際的な感覚を身につけ「生命の尊さと自然の大切さ」を学んでもらうことを目的としている。併せて地元の博物館学芸員らから、歴史・自然・産業も学んでいただいている。

カリキュラムは、講義・実習・作業、動物および自然施設研修や自然観察である。獣類のキツネやタヌキはイヌ科であり、シカはウシの仲間の知識で何とかなる。鳥類はレスキューとリハビリテーションの研修が主で、保護中の鳥獣への毎日の餌やり、野生復帰できないトビやハクチョウなどの生体を使って捕獲・保定（動物を動けなくすること）・強制給餌・採血などを行い、また遺体は体の仕組み・接骨術・注射法などの実習に使うわけで、彼らは貴重な「教材」である（写真1）。

標茶町の〝オオカミの森〟では、アメリカのイエローストーン国立公園での再導入の話や実際に飼育しているオオカミを見て絶滅種のレクチャーを受ける。釧路市動物園ではタンチョウなどをについて実習し、釧路湿原野生生物保護センターでは環境省のレンジャーから、オオワシ・オジロワシ・シマフクロウの保護の状況を見聞きする。そしてシマフクロウ保護団体の虹別コロカムイの会会長の話を聴いた後には、著者が実際に森の中へ

写真１　保護中のトビを使った強制給餌の実習風景

連れてゆき探梟案内をするなど希少種保護も教育している。標津サーモン科学館では野生動物の餌ともなるサケ・マスの生態や解剖実習など学んでいる。

自然観察会では、著者のホームフィールドでもある野付半島でおこなう。赤•青•黄色の夏の花々が咲き、野鳥の宝庫でもあり、オジロワシ・ノゴマ・ベニマシコ、そして干潟ではシギ・チドリ類が見られる。また釧路湿原では同じ低層湿原の野付半島とは大きく植生が異なること、タンチョウの数の多さなどについて自然ガイドから解説を受け、北海道の自然を味わってもらっている。もちろん身近なヒグマやエゾシカの問題も学んでいただく。

研修生受入れは火曜スタートと金曜スタートに班分けし、それぞれが総論と各論から始まるグループになる。いきなり看護や治療の各論から始まる参加者は大変だが、前後の班を合わせて全国に 10 数人の友達を作るメリットがある。研修は 7 泊 8 日の合宿形式で、ひと夏のためだけにログハウスも建てたほどで、受講料は味噌・醤油などの食料代から外部講師料を含めて実費である。

研修生は、男性 227 名(24%)に対し女性 714 名(76%)と、女性が多いのは、他の研修でも同じ傾向と言えそうだ。年次別参加者は図 1 に示す。学校•学科別では獣医系学生 485 名（51%)、獣医系以外の大学生・大学院生 138（15%)、専門学校生 233 名（25%)、一般 85 名（９%）で、23 年間の前半は専門学校生のウエイトが高いのが目立つ。ヒトの医療は医師だけでなく、看護師など医療専門職がいるのと同様、獣医師も助手がいないとやって行けないのが実情で、このことが非獣医系の皆さんを受け入れている理由である。もっとも、保護センターなら両刀使いだが、動物病院は〝医療〟施設であって、ヒナや野生復帰できない個体の世話は〝福祉〟分野のボランティアが必要で、欧米では「野生動物リハビリテーター」制度があり活躍している。日本でも、著者が立ち上げに協力した野生動物リハビリテーター協会や野生動物保護施設ネットワークにより救護ボランティア養成講座が実施されていることをつけ加えておこう。

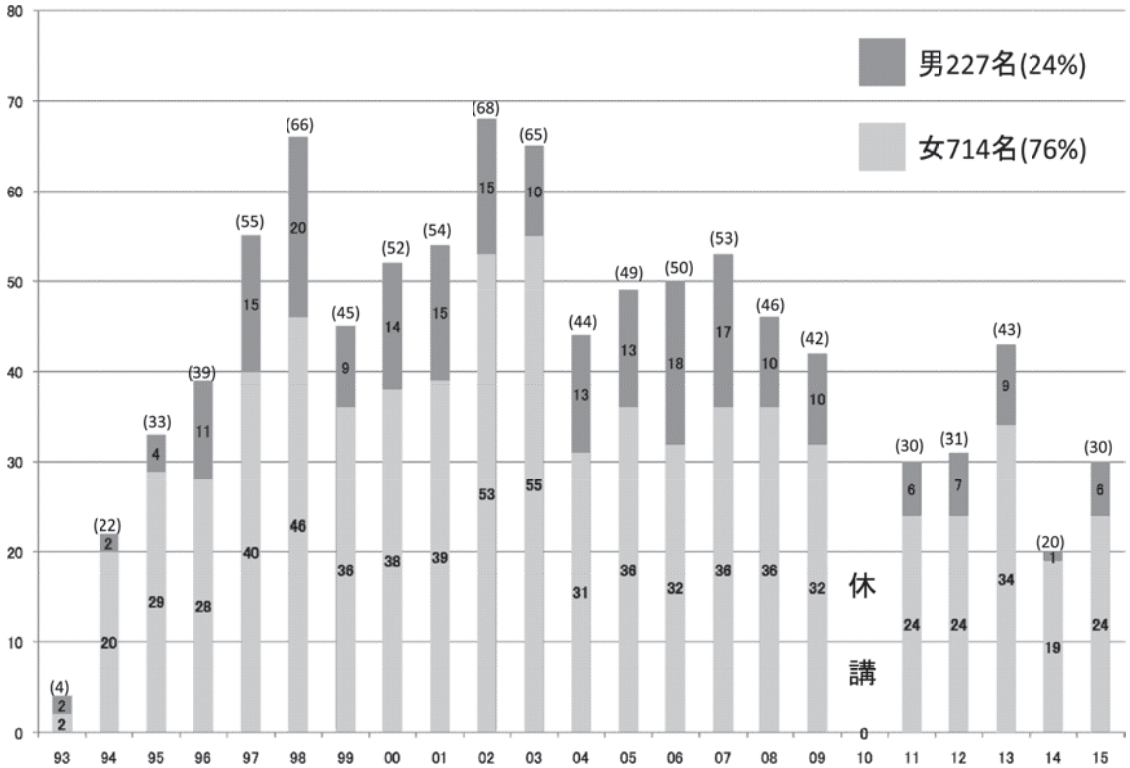

図１　年次別、男女別の研修生数（1993～2015）

20年前の学生と比べて最近の学生は優秀だが(東大生の参加も多い)、応用問題が解けないことが多く、一つ一つ指示をしないと行動できない傾向が強い。親の過保護やスマフォと関係があるのか？　したがって、「中標津」にふり仮名を付けず、まず場所探しや交通機関の選択から研修が始まり、食事作りや作業などで「頭を使う」ことも重視している。一週間で「自主性を取りもどしてナビなし」で帰って行くようになるが、大学や家庭では得られない教育も行っている。

修了生の「卒後教育」から始めた「野生動物保護セミナーin関東」は、この種の研修会が少なかっただけに公開講座とし、毎回学生を中心に約100名と好評だった。しかし、10回目には、全国各地にいる修了生の中で活躍している獣医系大学准教授、動物園獣医師、動物病院動物看護師らを講師に迎えて最後を飾り終了した。

「米国野生動物レスキュー研修ツアー」をカリフォルニア州立大学デービス校、ザ・マリンマンマル・センター（サンフランシスコ郊外）などの施設で2回、そしてミネソタ州立大学猛禽センターで2回主催した。また「オーストラリア野生動物環境・生態研修ツアー」をブリスベンのクイーンズランド大学、コアラ保護センターなどの施設で1回と世界最先端の技術を学ぶ海外研修も実施し、計110名の参加があったが、これらの中でもフィールド研修を組み込んでもらった。なお、米国の獣医系大学では夏休み期間中に学外の学生も受け入れて、野生動物医療とフィールドを組み合わせた「Envirovet（環境獣医学）」という研修がおこなわれている。米国とレベルの差はあるものの、「夏季セミナー」は米国の研修の「日本版」といえよう。

「一頭一羽助けてどうするの」、「希少種を救うのならともかく、害鳥獣を助けてどうするの」とお考えの方が結構いる。いわゆる「森を見て木を見ず」的な考えでしょう。「〝種〟による差別をして良いのか」が私の持論だ。獣医系大学で野生動物医療の授業がない「途上国」日本において、害鳥獣を含む野生動物を教材に使って学生や獣医師を技術的に普及向上させることは、希少種保護に役立つはずである。それ以前に、飼育動物ではほとんど誤診はないつもりだが、野鳥は助からないと思っていたら助かる、その逆もあり、27年間救護活動をやっていても診断は難しい。

標津サーモン科学館では森～川～海の関連を学芸員から、釧路湿原（写真2）や野付半島では自然ガイドの観察会も取り入れているのは、「医学（個体）と生態学（全体）は自然保護の車の両輪」

写真2　釧路湿原の温根内木道での自然観察風景

写真3　道東野生動物保護センターの入口の看板

との考えからである。保護センターの看板には「小さな野生動物の生命を救うことが、大きな自然を守る一歩になるのでは」（写真3）と書いてある。野生動物の動向は生物多様性の自然度の〝指標〟と言える。

23年間に新しい分野の「夏季セミナー」「関東セミナー」「海外研修ツアー」に1,000名余の参加を得て、研修・教育できたことは意義深いものを感じる。修了生の中で野生動物や自然保護に関わって頑張ってくれている姿を見ると嬉しいかぎりであるが、直接的に仕事につかなくても人生の中で自然環境保全に何らかのかたちで活かしてくれることを期待している。

最後に、野生動物保護研修を長く実施できたことは、大学の関係者や地元地域の多くの方々のご理解とご協力があったことと、深く感謝している。

森田 正治（もりた まさはる）

特定非営利活動法人　道東動物・自然研究所理事長、道東野生動物保護センター長。滋賀県出身。酪農学園大学卒。家畜診療所の勤務の後、森田動物病院長、酪農学園大学客員助教授や北海道ハイテクノロジー専門学校ペットビジネス科顧問・非常勤講師を経て、研修企画や環境教育に情熱を燃やす。初代の別海町野付半島ネイチャーセンター長退任後も野付半島ネイチャークラブ事務局長。著書：北の原野の動物医～野生のさけびを聞く（1994、くもん出版）、野生動物のレスキューマニュアル（編著、2006、文永堂出版）など